

とりどりの色に染まざる白鳥の如くにひとり漂はむかな
潮鳴か小夜の嵐かこれやこの港の街を三味のながるゝ
まれに來てまたしぬびかに行く船の航跡流の蒼白みかも
朝宵は物もなき海しんとして時たま氷を飛ぶ魚のあり

思ひ出

一部一年甲一

鹽谷安喜

おぼろげの幼き旅の思ひ出は長き坂にも残りけるかな
父とこし幼き我れの旅姿石段上る少年に思ふ
ばかくとあたゝみに午後までわみていらだつ心追はるゝ如くに
頼なき寂しき家出ではじめて知りぬ旅にやむとき
戀もなく望もなくてたゞひとり机の前に思ふ今日の日
雨の日の寄宿舎は寂しかり樋の音して日は暮れてゆく
辞書くりて一字拾ひて終るときかなしく我れの行手を思ふ
蝙蝠を合傘さしてぬれつゝも二人話して歸る雨の日
玻璃の窓霜夜の氷繪模様君の姿に氷れりと見る
にくしみに人にはなれずぬるやは人をあはれむ我が思ひ哉

——二首本妙寺にて——

日のもとの學ぶ子らなり強かれと君は叫びぬ催しの會
竹刀とり立ちて向はむ我が腕は男の子の意氣のほどばしりなり
病院のあたゝかき午後ま盛りの窓にそひたる梅のちりゆく
おどろきにながめし煉瓦の本館の日々に見ねゆく小さくかるく

——人を見舞ひて——

祇園歌集を讀みて

二、一、甲、二 原

田

弘

小夜千鳥君が寝がての秋の夜を涙あねかにさそひしとよな。
戀しやな炬燵布團に額うめて淡雪の夜を物思ふ人。
蓬の香其の日の夢の紫に涙甘くも匂ひけらずや。
近松の淨瑠璃の人とならむてふ君なればこそ歌もなつかし。
思ひ出は悲しなつかし宵々の祇園の人の舞の扇の。
戀語りやがて吾が身の噂なる祇園悲しや秋風吹けば。
春なれば雪洞の灯も匂ふらむ秋としいへばやゝに悲しも。
京の女は情うすしと君はいふあまり深くば命死ぬべし。